

## 華僑概念の再検討のために（続）

——G. W. スキナーのタイ華僑研究——

市 川 信 愛

も く じ

1. 76年度在外研究出張をふりかえて
2. G. William Skinner の華僑研究
3. タイの中国人——変貌する社会における同化問題——

＜資料その1＞

以上前号，以下本号

4. 中国人の同化とタイ国の政策（抄訳）

- (1) タイ中国人と同化問題
- (2) 同化率とその要因
- (3) タイの同化政策と政治エリート
  - ① 近代以前の同化政策
  - ② 20世紀初頭以降の同化政策
- (4) まとめと展望

＜資料その2＞ 華僑研究文献目録

Traditional chinese Society 関係（スキナー教授推薦のもの）

以下次号へ

5. 華僑概念の再検討のために

——G. W. スキナーの所説を中心に——

（訳注・1）

### 4. 中国人の同化とタイ国の政治＜抄訳＞

（訳注・1）

このペーパーは、“The Journal of Asian Studies” Vol XVI, No. 2, Feb. 1957 に掲載されたものであるから、既に20年の歳月が流れている。執筆当時は、コーネル大学極東研究所の専任研究員（Research Associate）として、既にバンコックのコーネル研究センターの所長の仕事を終え、近代インドネシア・プロジェクト研究のためジャカルタに滞在していた。インドネシア華僑の姿を目前にしつつ、タイ華僑の同化問題を執筆した訳で、文中に両者の比較が散見される。

なお本論は、スキナーのタイ華僑に関する2大代表作『タイの華僑社会—その史的分析』“Chinese Society in Thailand An Analytical History” Ithaca 1957 と『タイの華僑社会における指導と権力』“Leadership and Power in the Chinese Community of Thailand” Ithaca 1958, の中間に位している。云わば両著を結ぶダイジェストの論述といえる。

ここでもスキナーは華僑（Overseas Chinese）という語を一切用いず、中国人（Chinese）で

一貫し、部分的に Local Chinese (現地生の中国人), Chinese Imigrants (中国人移民) ないし Lu k jin (僑生) と区別している。したがって本文中明らかに通念的に「華僑」を指すと思われるところもそれぞれ, Chinese, Localchinese, Chinese imigrants, Lukjin として直訳し、華僑という訳語は一切用いなかった。なお彼は Lukjin とは現地女性を母に持つ中国人移民の子に限定して用いている。

最後に、内容の把握の便を考えて、文中に小見出しをつけたが、これは一切訳者(市川)のものである。また訳者注は随時中文に挿入し、原文脚注は、一括して文末に掲げた。

### (1) タイ中国人と同化問題

中国人は少なくとも6世紀の間シャムに移住し続けてきた。我々は中国人の移住者の子孫が完全にタイ社会の一員となる過程にここでは関心を持っている。もちろん同化は社会的な過程である。移住者の子孫にとって、同化の過程は、タイ社会の構成員との交際を増加させることによって規定される。最初には公けに、それから個人的に次第に親密になっていく。即ち、中国人というよりもタイ人として自己を規定づける方がより有利なことの多い社会条件の中ではなお更そうである。社会的な相互作用は言語上の伝達で基礎づけられるのであるから、同化とは不可避免的に、タイ言語の支配のもとへと巻き込まれていく。移住者が接触する社会の言語を譲り受けることは、文化変容の一部分、いわば他の社会の生活様式との進歩的な合体にはかならないのである。広範な文化変容は完全な同化なしに起こりうるかもしれないが、完全な同化は必然的にかなり完全な文化変容に伴われるか、不可分に随伴されるのである。ここでの我々の課題としての同化とは、移住者の子孫がほとんどすべての社会的地位にわたって、自らをタイ人として同一視し、日常慣習的にタイ語をしかも土着民と同じ位の流暢さをもって会話をし、中国人との交際よりももっとしばしば、タイ人との交際の方をえらぶとき、完全なものとなると考える。

「変らぬ中国人」(Unchanging Chinese)に関する民衆の神話にもかかわらず、中国人の移住者の子孫はシャムにおける中国人定住の起源からタイ社会に同化し続けている。16世紀中頃に先だって同化を示す間接的な証拠があり、それ以降の有効な資料としては、約1910年まで、目ざましい急速な割合を示している。19世紀には、中国人移住者の子供(二世)と実際にはすべての孫(三世)が完全なタイ社会への同化を実現した<sup>(1)</sup>。四世目の中国人については、未だ云々されていないが、それは中国人は少なくとも4世代もの間、定住していなかったり、家族を養っていなかったのではなくて、すべての中国人移住者の、ひ孫(4世)はタイ社会と溶けこんでいたからであった。

19世紀を通じてみられた中国人のシャムへの急速な同化率という特徴は、今世紀の最初の10年間に衰微しはじめ、全面的同化(full assimilation)は1910年から1947年の間、次第に自動的な経過をたどらなくなった。ところが最近8年間には中国人同化率が低落するのをやめ、現在再上昇しはじめている。

## （2）同化率とその要因

同化率に影響する要因は数多く、複雑である。一般的に、タイ人、中国人の文化間の類似性を重要な同化に先立つ要因として引き合いに出すことが出来る。タイ人の文化遺産には東南地方の中国人の文化遺産に共通する多くの点が常に存在する。両民族にとって好まれる食物は例えば、米や魚や豚肉である。タイ人がテラヴァダ（Theravada）<sup>（訳注2）</sup> 仏教を信仰している事は、仏教の他の宗派（eclecticism）を持つ中国人という近親感、宗教問題における中国人の伝統的寛容さや、折衷主義を考えると、社会的交流と文化面の親善関係の樹立には何ら障壁となるものはなかった。加えて、中国人とタイ人間の身体上の違いは見た目には比較的小さいものである。

（訳注2）Theravada Buddhism（小乗仏教の一派）は、タイの国教である。チュラロンコーン王治世以来、仏教は国家統合の平和的手段と考えられて来た。だが北方部族（カレン・ラオ・メオ・ヤオ等）には、依然伝統宗教が残存しており、その教化のため伝導、布教のほか、地域開発・学校教育等採用されて来たが、未だ十分効果をあげていない。

現在、タイ仏教は多数派のマハニカヤ派と少数派のダマチニカヤ派からなるが、大僧長は、2派の長老により選ばれ、それを、政府の宗教省の助言をえて国王が任命する。大僧長は、宗教行政を行う上で、各省から選ばれた10人の閣僚の助けをうけるしくみとなっている。（Encyclopaedia Britannica No.3, p.400より）

恐らく次の3つの明確な要因が、シャムにおける中国人同化率に対し重要な影響を与えるものとして選り出されうであろう。即ちそれはタイ人と中国人との通婚、教育、民族主義である。20世紀に入る前には中国人の女性ほとんどシャムに移住してこなかった。そのため、男性のタイ移住者はやむなくタイ女性や、よくて僑生の娘（lukjin girls）すなわち、中国人の父親とタイ人の母親との間の子と結婚したのである。中国人移住者のうちほとんどの子孫は母親がタイ人でありそしてすべての者が、少なくとも一人はタイ人の祖母を持つ。この状況はタイ人との社交を大いに容易にし、タイ人として考えることに意味をそえ、さらにタイ語の取得を確実にした。しかしながら1900年と1947年の間は中国人女性<sup>（2）</sup>の比率は着実に増加し、遂に移住者の3分の1に達した。この変化だけでも同化率の速度を低落させることができた。

教育に関しては、1910年までは、ごくとるに足りない割合であったにしろ、ある種の公式の中国語の学校教育をうけた。最初の中国人共同体学校（Community School）<sup>（訳注3）</sup> はほぼその当時に設立された。その後、中国人の教育施設は、一時期中断することがあっても1938年まで急速に拡大した。20世紀以前の同化はまた、国粋主義の感覚がシャムにおける中国人居住者の間に欠除していたことによって、容易になされたのである。広い範囲で中国の法律は祖国から出国したかどで彼らを罪人とした。シャムの中国人は祖国政府に支持されて統合するどころか、小言語集団に細分されていたため、国民的忠誠はほとんど持たず、むしろそれは郷土愛に敵対するものとされた。中国革命へと続く諸事件、満州国政府の転覆や孫文の革命運動の前進と終局的勝利は、今世紀初頭の数十年間に状況を一変してしまった。

すべての言語集団の中国人は中華主義という民族主義（China-oriented nationalism）にめざめ連帯の契機を獲得した。そして、この民族的に同一という新しい意識は、一そう同化率を低める傾向を生んだ。

（訳注3）Community school（共同体学校）の実体は、各会館ごとに説立された一種の私塾的性格のものだったが、1911年の辛亥革命を契機に近代化した。

例えば、客属総会では廟宇、学舎、会所とを一つの建物に収め従来の寺小屋式から近代的な「徳進学校」を1913年完成。海南会館では1921年「育民学校」を創立、瓊州公所が同居した。広肇会館では1911年「華益学校」を福建会館では1912年「培元学校」をそれぞれ創設、潮州会館の設立はおくれ1930年代であったが、学校は20世紀初頭既に「培英学校」を有していた。

拙稿「タイ国社会の特質と幫の諸形態」、須山、市川共著『華僑社会の特質と幫派』（1976年3月）所収、pp. 54～65

### （3）タイの同化政策と政治エリート

もしこれらの要因が決定的なものであるなら、他の要因もまた関連性が深い。この論文の中では、私はタイの政界とかかわりあいのあるそれらの要因のみを考察したい。<sup>(3)</sup>この要因についてはしばしば低く評価され勝なので、タイ政府の政策と政治エリートの性格が中国人の同化率に少なからず重要な影響を及ぼす事実を明らかにすることを目的とする。

かかる要因の一つは普遍的で際立って重要である。一時的な幕合いを除いて、タイ政府は13世紀以来今まで彼ら自身の国においては政治の達人であった。最高の名声と最も満ち足りた社会的乃至物質的報酬を政治の仕事に従事している者に与えるタイ人特有の価値体系のために、この国のエリートは一権力だけでなく、名声、啓明、安寧や財力にさえも関与しつつ——ずっとタイの支配階級であったのである。その結果、中国人移住者の子孫が上層階級に移行すること——皆そう望んでいるのだから——がタイ社会を巻き込む社会的運動となったのである。

これと対象的に東南アジアの他の全ての国は、19世紀末まで西洋の政治支配下にあった。東インドでは、エリート層はオランダ人やオランダ系ユーラシア人で構成されていた。一方、様々なインドネシア人は、一般的に中国人の社会的地位よりもより低い地位にあったのである。海峡植民地では英国人は国際社会の主要な価値を一手に獲得するエリートの全世界にわたる地位を独占した。オランダ人やユーラシア人あるいはイギリス人のエリート社会に完全に同化することが不可能だからといってジャワやスンダやマレー社会に同化することは、中国人にとって何らの利点もあろうはずがなかった。ところがシャムにおいては土着のタイ社会に適応するとあらゆる利益があった。というのは、富すらをも含めて中国人が評価するあらゆる重要なもののうち、最高のものがエリート層の中に見出されたからである。

#### ① 近代以前の同化政策

このことについて、基本的に熟考してみて、中国人の同化に影響を及ぼしたタイ政府の政策についてここでふりかえてみよう。近代以前のシャムにおいて、そしてモンクート

（Mongkut）とチュラロンコン（Jualalongkon）王の統治時代を通じて、中国人同化を促進する首尾一貫した王の政策のあとをいくつかたどることができる。その最初のものは、中国人をタイの民衆とは違ったものとして識別する厳しい政策上のそして統治上の定義であった。この政策は、中国人の社会的持続性を歓迎する様に見えるにかかわらず、実際には大多数のタイ人社会と分断した中間の中国－タイ社会の発展を防止することによって完全な同化を促進した。20世紀以前はいつでも、中国人移民の子供や孫たちは成人に達した時、彼ら自身を、中国人ないしタイ人のどちらかに決定することが義務づけられていた。アユタヤ王朝の時代（1350～1767）には、外国のすべての民族グループに適用された制度によって、中国人は政府の行政上の職階制度（ヒエラルヒィ）の中の長官（capitan）と、支配人（master）の監督下におかれた。同様にタイの民衆もグループにわけられてエリート層の個人的なタイ人の主人（patron）や親方（master）の下に編入された。誰もがその制度に適合するとなると、いわゆる、現地（local）で生まれた中国人は彼らの父親の中国人の支配人（master）のもとに居残るかタイ人の主人（patron）を捜すかしなければならなかったのである。この政策は初期5年のジャクリー（Jakkri）王朝の統治中に強化された。タイ人は賦役（corvée）を課せられており、彼らの主人からいれづみを入れられていた。一方中国人は賦役の代わりに3年ごとの税金が課されており、それを支払う際には彼らは腕につけた札に目に見える様に印をつけられたのである。2つの民族集団のはっきりと区別のつく外見は、髪型と服装の違いで特徴づけられた。弁髪は中国人であると自認する限り、すべての男に結ばせられたし、一方、短く髪を結び上げたり、刈り上げた頭はタイ人に強制されたのである。どの主だった中国人居留地についても、中国人の首領（headman）は国王によって彼の民族集団に対する行政的、司法的権限を附与された。このようにして、中国人の子孫は弁髪をし、中国人首領の司法権を承認し、3年ごとの税金を払い、腕にしるしをつけられるか、さもなければ彼は髪をくくり、タイ人の主人（patron）との間に主従の関係をづくり、いれづみを入れられ、強制労働の部隊の一員に入ったのであった。2つのうち、いずれか1つを選択すべきで、どちらも拒否したり、2つを混ぜあわせたりは出来なかった。

今や、現地生れの中国人子孫の複雑な親子関係や、中国語教育や民族的忠誠の欠除などはみな部分的に文化変容を促進させた。すなわち彼の生活様式はタイと中国の要素の両方を混合して出来ていた。しかしながら政府の政策は、簡単に輪郭を描くなら、彼が2つの社会の間で均衡しているのを、中国か、タイ社会のどちらかをそれぞれ個人に選択させることによって取り除くものである。文化変容の促進要因は、いずれも世代が続くとともに強化されたので、どんな家系の血統でなされた選択でも結局はタイ人であり、一たび選択されるなら、完全な同化へ必然的に導かれる。このようにして、ジャワのパラナカン（Paranakan）<sup>（訳注4）</sup> 中国人社会に比すべき社会はシャムには決して現われなかった。  
（訳注4）ジャワ・パラナカン華僑社会（Paranakan 別名 Panarukan ともいう）インドネシア華

僑は、インドネシア独立後、オランダ資本の後退とともに貿易、商業、工業の面にまで進出、現地住民の反ばつをかき、排華運動が起った。これは二重国籍問題として、インドネシア政府と中華人民共和国との間の紛争に発展し、1955年4月と1958年1月に両国間に条約がとり決められたが依然落着せず、1963年5月には華僑排撃の大暴動へと発展した。その発火地点となったのが、東ジャワのパナルカン（別名 Panarukan パナルカン）であり、この華僑は中共系と目されていた。（日本国際研究所・インドネシア部会編『インドネシア資料集』上・下参照）

すなわち、その文化が、中国人と土着の人間との間の中間である社会であり、十分な社会的交流や、土着の社会と同一視することを忌避する社会だからである。このような同化のわなといった社会機能のため、中国人移住者の子孫は簡単に構成員とはなるが、中国人社会を抜け出して土着の社会に入るとはめったにないのである。

17世紀切頭から19世紀なかばまでタイの国王たちは利益のあるアジア貿易に従事する商人王であったという事実は、中国人商人和タイ人エリート間の商業上の協力と社会的交流を促進した。タイの王は、中国人の商業的、金融的及び航海上の技術に頼っていたし、中国人は、他国に開港していない多くの中国や日本の港に接近できた。1630年以降、国の内外にいる国王の代理業者、倉庫業者や計理官、王の所有する貿易ジャンクの船員や積荷監督官はほとんど独占的に中国人であった。タイの国家貿易は1767年と1850年の間に前出の例以上に拡大した。そして、中・タイ間の商業上の協力は急速に発展した。タイの貴族商人たちとのかかわり合いから中国人は権力や名声と同様に、金もうけることについてタイエリートは貿易上の収益の最切のピンハネをした。一方リスクを引きうている中国商人は残ったものを得るだけだった。このことは、タイエリート層に同化したいという中国人貿易商の願望を必然的に刺激することになった。

この過程はまた国王の政策によって直接に奨励された。タイの歴史を通して、また、ある期間には驚くほどの一貫性をもって、タイ専制的国王は、タイ人の貴族社会に中国人を列することをもくろむ政策を推進しそして、王家に対する中国人の忠誠心を確実にすることをもくろむ政策を採用した。1480年には早くも中国移住者が貴族とされ公職の地位を与えられたことが分かっている。17世紀には多数の中国人がタイ国王や属領国の統治者によって高い地位や高い官職に任命された。

ナライ（Narai）王の統治下では、国王の海軍長官プラ・シウプト（Phra Siwipot）と司法長官であるプラヤ・ヨマラト（Phraya Yommarat）は中国人であった。ナライ王朝時代に6人以下の中国人官吏がタイ王につかえていたことが西欧の文献に書かれている。アユタヤ（Ayutthaya）王朝時代後期には、ギャンブル開張承認のためによい値をつけた中国人は自動的に貴族とされた。タクシン（Taksin）王（1767—82）は儒生（lukjin）であったが、任命する時には、中国人を重用し、中国人とタイ支配階級との社会的関係を大いに促進した。彼は呉ウオン（Wu wang）という一人の中国人移住者を貴族とし、彼を、シャムの重要な南部属領の一つであるソングラ（Songkhla）の統治者に任命し

た。

この例は最初の5人のジャクリ（Jakkri）王によって、代々継承された。第3代目の治世（1842～51）の初めまで、ラノン、ソンクラ、ナコンシタマラ、ジャタブリ（Ranong, Songkhla, Nakhonsithammarat, Janthaburi）の統治者や首長は中国人であった。プケット（Phuket）のルアン・ラジャ・カピタン（Luang-raja Capitan）も中国人であった。第5代目の治世下（1868～1910）の一時期には、パタニ、トモ、タング、ラノン、クラー、ランサン、パクナム（Pattani, Tomo, Trang, Ranong, Kra, Langsuan, Paknam）に中国人の統治者や長官がいた。いわば、タイの行政に一たびその跡を残してからは、中国人の才能ある人々はタイ政府に忠誠を尽し、結局はタイエリートに完全に同化してしまった。呉ヤン（Wu Yang）の子孫はよい例証を提供している。彼の息子は今だに中国語を話し、中国の様式で埋葬された。しかし彼の孫は、またソンクラ（Songkhla）の統治者として仕えたが、テラヴダ（Theravada）仏教徒であり、第2の言葉としてだけ中国語を学んだ。そして全くタイの様式で火葬にされてしまった。そのひ孫の統治者は中国語を全く話さず、中国名さえも持たない。そして家族内部で、何世代も離れた者と、曾祖父の肝をつぶさせるような様式で近親結婚をした。1865年まで家族は完全にタイエリートに同化させられた。別の例証は、第2代のジャクリ（Jakkri）王時代に貴族に列せられラノン（Ranong）の統治者に任命された福建（Hokkien）の移住者である許泗章（Hsii Ssu-chang）の子孫によって示されている。彼の息子のうち4人はまたチュラロンコン（Jualongkon）王によって貴族に列せられ、南シャムの統治者に任命された。これら4人のうちで最も偉大なのは許森美（Hsii-San mei）であり、プラヤ・ラサダ（Phraya Ratsada）の称号で貴族に列せられていた。1901年には、内務大臣（the Minister of the Interior）邸におけるタイ王子と官吏の大集会の席上で、彼は彼の弁髪を切ってしまうことで彼の国籍を変えた。ペナン（Penang）に移った許泗章（Hsii-Ssu-chang）の孫が中国人である間に、シャムにいる彼らはタイエリートに同化したことは意味深長である。

最初の5代のジャクリ（Jakkri）王朝時代を通して、他の多くの有名な中国人は王によって貴族に列せられ、タイエリートへと引き入れられた。中国人の大蔵官吏、税関吏、徴税官吏や宮廷学者などはいずれも王から貴族の称号を与えられた。大多数の中国人は歳入の独占権を有していたので、中国人商人の中で最も富裕で最も権力のある者は貴族となった。中国人の領首達もまた王や地方の王族によって官制上の位階を与えられた。19世紀の最も鋭い研究者たちがこの政策の意義を見落す筈はなかった。第三代王の時代、グツラフ（Gutzlaff）は中国人は称号を与えられた時から「彼らは王の奴隷となる」と指摘した。第四代王の時代（1851～68）にはラクエツ（Raquez）は更にこう皮肉っている。「シャムの政策は古い格言、“分割し統治する”を実行に移したのだ。シャム人は中国人のうち最も幸運な者に彼らの貴族の階級を開いてきたのである。」と。

シャムの政策の成功はめざましかった。チュラロンコン (Julalogkon) 王の統治時代に貴族に列せられた中国人の子孫は現在では指導的なタイ人家族の中にいる。政府は政府の目的に奉仕する中国人エリートの上ずみをすくいとりが、中国社会それ自体はすくいとらないことに成功した。

中国人指導者の大量離脱によって中国社会の粘性と中国人集団の一部における同化への反抗とが、大いに弱められた。王が著名な中国人を貴族にしていた時ですら、彼ら僑生の娘たち (lukjin daughters) は、積極的にしかもうまくタイエリートによって妻として求められた。19世紀初頭の或文献はシャム人の首長は、「シャム人女性よりも中国人の娘や中国人の血をひく婦人をめとった」とのべている。初期のチャクリ (Jakkri) 王たちは、いずれも僑生 (lukjin) の王妃か女王をもっていた。

初めの5代のチャクリ (Jakkri) 王の公約した政策は少なくともタイ人と同様に中国人を取り扱うことであった。1855年以前に、他の外国人とは対照的に中国人は首都以外の地を旅行したり居をかまえる権利を有していた。このことは国内のどこにでも住みつくことを促し、タイ民衆の内部に稀薄な中国人口を分散したため同化は最も速かった。チュラロンコン (Julalongkon) 王が1907年に指摘した如く、王室はシャムにいる中国人を「外国人としてでなく王国の構成分子の一つ」としてみなした。この姿勢は、中国人にタイ人エリートが慈悲深く、魅力ある集団であるという考えを抱せるに力をかけたのである。そして中国人に、タイエリート層の内に地位を獲得しようと、一層熱中させた。そして、人種意識をほのめかすことはどちらの側にもほとんどなかったのである。

(訳注5) チャクリ王朝 Jakkri (1782~)

現タイ王朝で9代を数える。初代から5代までは親華僑=優遇政策をとり、6代以降の政策と対象的である。尚、下記の王名は本文中のスペルと異なるがそのままとした。

初代 Phra Buddha-Yodfa Chula lok (1782~1809)

2代 Phra Buddha-Loetta Nobhalai (1809~1824)

3代 Phra Nang-Klao Chaoyohua (1824~1851)

4代 Phra Chon-Klar Chaoyohua (1851~1868)

この代以降別称で呼ぶ。モンクツ王 (Mongkut)

5代 Phra Chulchom-Klao Chaoyu (1868~1910)

別称、チラロンコン王 (Chalalong Kom)

6代 Phra Mongkut-Klao Chaoyuhua (1910~1925)

別称ワチラウツ王 (Vajira vudh)

7代 Phra Pok-Klao Chaoyuhua (1925~1935)

別称プラヂャーティボク王 (Prajadipok)

8代 Pra Paramin dra Maha Ananda Mahidol

別称アーナンダマヒドール王

9代 Pra Paranandra Maha Bhumibol Adulyadej



別称ブミポンアドラーヤデーツ

8, 9代は、アンダラインのところが別称となっている。

星田晋五『タイ——その生活と文化』1972年9月, 学研出版による。

## ② 20世紀初頭以降の同化政策

タイエリートの中にあるこのような寛容な性質が、急速に逆転したのは1910年のチュロンコン（Julalongkon）王の死後、ワチラウット（Wachirawut 別に Vajiravudh）とも書く。訳者注）王の即位のときからである。新しい王はちょうどこの時期に台頭してきたタイのナショナリズムを代表した。その最も顕著な現れの一つは中国人とタイ人間の違いを強調する民族中心主義（ethnocentrism）であった。いうまでもなく、この2つの民族のように性格の異なる種族集団間の接触は紋切り型になりやすいわけだが、民族間に職業の専門化のあるシャムにあっては、激しい対立となってしまったのである。

しかしながら、これらの紋切り型や偏見は、単に西欧からナショナリズムを吸収してきたタイエリートにとってのみ政治的重要性を持ったにすぎなかった。中国からの祖先の移住や、中国の支配からタイが独立するための、ずっと初期の斗争のことをタイエリートが知ったのは、西洋の学者からだった。欧州で彼等は、政治的次元において民族中心主義（ethnocentrism）の意義を評価する様になったし、初めて、反ユダヤ主義や黄禍（反中国主義）の教義に出会ったのである。とりわけ彼らはシャムにおいては、中国人に対する欧州人の好ましからぬ態度にさらされたのであり、そのような姿勢はおそらく西欧人が中国人——貿易上の商売敵（カタギ）か低い地位の雇用者のどちらか——ともった接触の性格から生じたのであろう。世紀の交代期にシャムに仕えた次の2人の英国人は典型的である。王立鉱山省の長官であるウオーリントン・スミス（Warrington Smyth）は中国人は「水牛の群を、おそらくは均等に配分する」ことのできる、そういった高い資質の人たちだと考えた。そして中国人をけなして「シャムのユダヤ人」と名づけ、「彼らはシャム人を掌中に収めており」さらに「バンコクの半分を1日で袋につめることができる」と主張した。

教育顧問官の J. D. G. キャンベル（Campbell）は、もの静かで愛すべき土着のタイ人は事実上、彼らの生得の権利を物質的快楽と引替に中国人に売り渡したという意見であった。フランス人やイギリス人の顧問や研究者は、シャムは結局、「完全に中国人分子によって吸収されてしまう」だろうという事に同意した。ヨーロッパ風の教育を受けたタイ人エリートは、これらの西洋の偏見や恐怖心を回避することはほとんどできなかった。彼らは西洋の学校に在籍していたのだから、バンコクにいる西洋の通商団及び外交団と楽しく語り合い、そこで発行された英字新聞を読み、ヨーロッパ人顧問らのいう公的忠告に支配されたのである。シャムにおける中国人のナショナリズムの台頭とその証跡はまた、タイナショナリズムの民族優越主義的方向に貢献したのである。

そういった方向は、1914年に出版された『東洋のユダヤ人』という題の小冊子の中で、

ウォチラワット (Wachirawut) 国王自身によって具体化され、定義づけられた。<sup>(17)</sup> 其中で彼は、ユダヤ人を諷刺した反ユダヤ主義者の漫画を使って中国人と入念に比較し、国家の悪幣の身代りを中国人に帰するというタイ人エリートの標準的知的要素の一部を提示した。ウォチラワット王はまた、中国人を貴族に列することは彼の前任者より少なく、また彼の後継者ラチャチポク (Rachathipok) 王は外国人が公務に近づくことすら制限した。

ウォチラワットの統治の初めまでで、中国人社会とタイ人社会を区分し、それによって多くの現地生まれの華僑に対して完全な同化を強制した政治制度は、終焉した。またタイ人社会の賦役とパトロン制度も、中国人社会に対する3年ごとの納税や腕に札をつけて印をすることも、ともに5代目まで存続しなかった。中国人はまた、1911年の辛亥革命後弁髪を棄て続く20年の間に両民族に特徴的な衣服や髪型は、西洋風に厳しく修正された。特徴的な中間的文化を持つ、タイ中国結合社会の可能性が初めて現れた。現地生まれの中国人の中間的地位は1909年の第一次中国人国籍法の発布によってさらにいっそう混合された。その国籍法は中国人が親である子は中国籍であると断定した。さらに1913年にタイ国籍法 (The Thai Nationality Act) が続いて発布され、同法は、「タイ領土で生まれた者すべてをタイ人だ」と規定した。

事実上タイ国王によって布告された社会関係における劇的な変化や、タイ人エリート間にある民族優越主義者の態度の出現は、1910年あたりに位置するはずである。しかしながら中国革命の勃発や公的な中国語教育の開始や、中国人移民の間の女性の割合の増加等と同時期に発生したために、単に、これらの政治的要因のみの同化に及ぼす影響を評価することは難しい。それにもましてこれらの変化にもかかわらず、タイ政府は正に1938年まで同化賛成論者の政策を、ほぼ終始一貫して持続したのである。中国人の同化を奨励することを意図する効果的な計画は、1925年のウォチラワット王の死後、特に明白になってきたのである。

まず第1に、国籍法と帰化法は、変えないままにしていた。そのため、現地生れの華僑は自動的にタイ市民となった。そして5年間この国に居住していた「性格の良い、満足のゆく生活の資を持つ」中国人は帰化を志願することが出来たのである。<sup>(18)</sup> 第2に、他の私立学校といっしょに中国人学校は、1919年に始まるますます用心深くなる政府の規制のもとにおかれた。中国語に充てられるはずの時間数は、次第に減らされた。そしてタイ語の指導とタイ人教師の雇用が強制された。1933~34年に中国人学校をタイ化する運動が最も活発に行なわれた。その結果中国人学校に在籍する生徒の数が8000以上いたのが、5000を下回るにいたった。その期間中に、法令制定のペースは共に極めて速く、その無慈悲さは、最大限同化に賛同する趣旨に立ってみても極めて際立っていた。そして政府は、中国人学校制度の代替としては、何一つ魅力ある教育施設を提供する真面目な努力をしていなかった。しかし、その政策は、それでもなお、長きにわたって効果的であった。第二次世界大戦前のピーク時における中国人学校の在籍者は17,000人よりは少なかった——他のほとん

どの東南アジア諸国と比較は極めて不十分にしか示せないが——これらの学校で与えられた教育は、地域内の他のどこよりも特色のある中国語教育があったというより、むしろ強力な現地当局からの介入がなされたのである。<sup>49</sup>

3 番目に、移民に関する政府の規制は1927年の第一次移民法の時から効果をあげていた。入国税や居留税は1931年から1932年にある程度制止効果のある水準にまで高められ、1937年には再び、さらに厳しく引上げられた。読み書き能力の試験はまた、入国者の中にしめる女性の割合を減らし、かくして中国人同志家庭を作る傾向を阻止する意図をもって課されたのである。このような政府の規制は、30年代を通じて、中国人入国者数を低い水準に押えることに、かなりの効果をあげた。

4 番目に、職業に関する政府の規制は、外国生まれのタイ市民に対してでなく外国人に対して少し差別扱いのある基準に限定された。

5 番目に、この期間を通して、タイ政府は、現地の中国大使館が、中国民族主義者の感情をあおりたて、現地生れの中国人をタイ国への忠誠から遠ざけようとする恐れをなくすために、中国政府が、外交関係を樹立しようとするのに効果的に抵抗した。

他の重要度の薄い問題に関しては、タイ政府は、その政策によって、同化の邪魔をした。労働の分野では、タイ人は、ストライキをする時に中国人とせり合わされた。そして30年代に成立した選挙法はタイ人の父をもって生まれたタイ人よりも、外人の父を持って生れたタイ国人や帰化した市民にずっと厳しい要件を課していた。歳入への考慮から、アヘンを喫うことなど中国人だけに限られ、タイ人の目にはうとましい大部分の習慣を規制するために、何らの処置も講じられなかった。しかしながら、結局のところタイ政府の政策は、1938年まで、同化賛成論者のものであった。だがとりわけ1927～38年の間は、実際に生じたよりも、まちがいなくさらにずっと同化率をおそくするよう抑制する役割を負わされたのである。

（訳注6）

ところが1938年12月の、行政の変革後、中国人に対するタイの政策は、無慈悲な圧迫や抑制の政策に急速に変化した。ピブン・ソングラム（Pibun Songgram）の最初の首相在任の間、タイ統治階級に対する中国人の憤慨はあふれ出て、集団内部の団結と忠誠が強調された。10の重要な貿易や商売上の中国人の地位は、1938年12月と1939年5月の間に矢張り早やに公布された一連の法令や法律で攻撃された。タイ人を商業や産業に従事する生活につけようとするますます活発化する試みは、1939年11月に出された国の第5次文化条令（The Fifth Cultural Mandate of the State）によって愛国主義の基礎の上にのせられた。その条令はタイの愛国者にタイ製造業によるタイ産の食料だけ食べ、タイで生産された衣服—タイ製布地なら—そうよい—を着て、貿易や産業に従事するよう、お互に援助し合う事を求めている。経済をタイ化する総力的運動は、或る種の政治的圧迫と結合して進められた。すなわち日本との闘争に中国を支援することを意図した中国民族主義者の組織とあらゆる活動は1939年1月から8月の間にタイ警察によって鎮圧された。1939年4月

には、教育省は、私立学校が中国語を教えることの出来る時間を1週間につきたった2時間にカットした。それにつづいて学校の閉鎖があいつぎ、8月に頂点に達した。また、8月には、たった一つの例外を除いてあらゆる中国語の新聞が廃刊された。<sup>(20)</sup>

(訳注6) ピブンの弾圧の背景の一つに在泰華僑の民族意識の高揚のあることも見落せないであろう。

例えば、五四運動(1930年)のあと、本国で就学していたタイ華僑の子弟が陸続として帰って来た。彼等はタイ国中国人学校の教師となり、大いに三民主義の思想教育を教えた。そしてタイ国華僑社会初めての、各幫を連合した華僑学校の連合運動会が開催され、皇帝も臨席空前の成況ぶりを呈した。それからわずか数日も経たぬ内に「教育条例」をタイ政府は発布し、私立学校におけるタイ語教育の履修(週25時間)を義務づけし、違反には嚴罰をもって臨んだ。

現地生れの中国人は、これらのものすごい基準にびっくりし、憤慨して、彼らは、中国出身の両親や祖父母の擁護に結集した。同化賛成政策は1940年の報道関係との会見でピブン(Phibun)によって葬りさられた。彼はその時「官吏が若し自ら外人と結婚することを慎しみ、市民に対して外人よりもお互同士で結婚するのが幸福だと忠告するならば、国家のためにさらによいこととなろう」と語った。抑制政策は、政治、教育、経済領域において、ピブン(Phibun)の第一次内閣を通して厳しくおこなわれた。1940年の終わりまでに、全国にまだ開いている中国人学校はたった2つだった。民族主義に同調する中国人の逮捕や国外追放は1940年を通して続き、1941年12月の日本進駐後に最高の頂点に達した。

1942年6月には、政府はタイ人のために、27の異なった職業や専門職を確保した。それは以前ほとんど中国人によって占められていたのである。1941年と1943年の間に10の州と4つのより小さな都市地域は、外人の住む地域ではないと宣言された。そしてあらゆる中国国籍者は短い通告で、立ちのかねばならなかった。1943年には、中国国籍者がタイ国の土地を買うことを効果的に禁ずる法案が通過した。

1944年ピブン(Phibun)の政界からの引退や1945年の戦争の終結は、現地の中国人に関する政策のほとんど完全な逆転をもたらした。同化反対論者の願望を満足させ、ほとんどの中国人の、同化したいという願望を効果的に抹殺してきた法外な抑制と圧迫とは、中国人に対するほとんど完全な自由へと切り替えられた。勝利した中国の新しい国際的地位によって強要された主要な政治変化の中で、外交関係が南京と樹立され、4つの中国領事館が、バンコク(Bangkok)にある大使館に加えて地方の拠点都市に設けられた。在タイ中国外交官の役割は、ほとんどすべての点において同化反対論者のものであった。中国語教育は、効果的な規制がほとんどなしに普及するのを許された。そして中国人学校の数は1947年末までに400を越えるに至った。移民もまた、インフレーションにより、納付させられる登録税が取るに足りない額となったのを除いて無制限となり、17万人の中国人移住者が、1946年から47年の2年間に、この国に大挙して集まった。政府の自由放任政策や、タイ国に、外交官や領事の事務所をもつ5大国の一つとしての中国の新しい役割の故に、同化率は、1947年にいままでの最低を示した。中国名を用い、中国語を学び、時として自分

を中国人と認める中国人移民のひ孫の例すらあった。

1947年11月のクーデターの起る前に、政府はその成り行きまかせの政策を点検した。中国人学校は1947年に、<sup>ナグ</sup>隠やかな統制のもとにおかれ、そして中国人移民の割当ワクは、例年、1万人に設定された。1948年4月にピブンが政権に復帰した後、彼は、たとえ単に否定的にそうであったとしても、同化賛成論者としての中国人政策を続行した。1948年には中国人の中級学校は、全土にわたって閉鎖され、初級学校は、30年代中頃のそれに似た厳格な管理のもとにおかれた。1949年には、中国人移民の総数は、年間、たった200人という割当てワクで終わった。中国大使館の機能はタイ側の強制と中国人の必要の両方で調整された。そして、4つの地方領事館は閉鎖された。タイ人のための職業上の特別留保は1949年に、また復活した。

ところが1951年11月のクーデター後、圧迫や抑制というより厳格な政策へと、大きな揺り戻しが起った。在住中国人へ影響する衝撃の点においては、1952年、53年は、1939年、40年の暗黒の年に比肩できるものだった。1952年の初めには、年間外人登録税は、20パーツ（baht）から400パーツへと引上げられた。11月には、数百人の中国人の逮捕や非タイ活動法（Un-Thai Activities Act）が主に中国人に向けられた。すさまじい勢の共產主義者を排撃する風潮や数カ所の中国人学校の閉鎖と、2つの左翼系中国語新聞の廃刊といった、一連の共產主義者排撃の手入れが初まった。1952年～53年を通して、内閣の布告は、中国人を父とするタイ市民に、土地を得ようとする権利を大幅に制限した。1953年1月には、兵役法（the Military Service Law）が、外国人を父とするタイ市民の兵役を免除するよう修正されたが、それは中国生れの市民に対する一種の侮辱であった。2月には、国籍法（Nationality Act）が修正され、中国人を母に持つタイ生れの者は、出生だけではも早タイ市民権を得られなくなった。

これらの基準のすべては、事実上、大いに反同化論者のものであった。しかし、それらはすぐ単に一時的であるだけだということが分った。1955年7月には、内閣は中国人に対し新しい自由化政策を宣言した。8月には、兵役法（the Military Service Law）が今度は、外国籍の市民に差別扱いをする規定を除去するため、修正され、そして、土地の獲得に対して、市民を差別する法令もまた廃止された。1955年10月には、外人の階級を広く6つに定義することによって、外国人登録税の支払い免除に適用されるような規則が公布された。そして1956年1月に、税額それ自体は、200パーツに減らされた。1956年3月に新選挙法（Electoral Law）が公布され、外国人を父にもつタイ生れの人と帰化したタイ市民に対し国民議会（National Assembly）の選挙に立候補する基本権を広げた。国籍法は、今や市民権を、外人を母に持つタイ国出身者に恢復さすために、修正の途上にあり、居留中国人（Chinese aliens）の帰化が公式に奨励されている。同時に、8年間に中国人学校に在籍する生徒の数が、175,000人以上から5万人以下に減少した。このような、中国語教育における衰退傾向を建て直す教育政策における何らかの基本的変化は企図されて

いない。加えて、新人種間労働組合同盟が、警察の被護の下で構成されてきたし、行政当局は、アヘンの喫煙を終結させ、アヘン常用者を回復させる計画を発表した。現在ほとんどあらゆる点において、タイ政府は、持続的かつ、合理的な同化賛成の立場をとっている。振り返ってみると、1952年から53年の抑圧的な封じ込め政策は、現地生れの華僑に対して1955年から56年の慈悲深い休息のための心理的な軽減措置として役立ったのである。中国人は今や、1920年代以降のどんな時期よりも、同化を受け入れるのにはるかによい心情的準備ができているのである。

他の側面からみると、1948年以来の政府の政策は、中国人の同化を大きく促進するのに影響力を持っていたのである。第二次ピブン内閣時代の変動しやすい職業政策と、彼の寡頭政治が最近になってやっと力を持つようになってきた事実は、中国商人とタイ政治エリート間の新しい同盟を刺激した。強力ではあるが断続的な中国人の職業に対する政府の圧迫に直面して、中国人特有の商売が何時、タイ人のために保留され厳しい統制に服させられるか、中国人の店の賃貸借契約や中国人の事業資産の権利が何時おびやかされるか、あるいは中国人の商売が何時なにかき税務署員に検査されたり、警官に急襲されるかについては誰も知らない。変化し、相反する法律の字句の完全な範囲内で、有利に稼ぐことの出来る商売人はほとんどいない。そのため、わいろや、強迫や返品等は、タイ国において商売をやっていく上での共通の特徴である。商売の安全を得るためのより効果的な方策の必要性は、50年代初期にますます明白になってきた。もっと大きな商人にとっては、保護や特別扱いを少しづつ購入するのは極めてわづらわしく、危険で頼りにならなくなった。

指導的立場にある中国商人によって見出されたこの問題への最も一般的な解決法はタイ官吏と公的事業上での同盟を成功させることによって影響力あるタイ人官吏の永続的な保護を獲得することであった。この目的のため各部局のタイ人官吏を抱え込むために、1951年以来、主要な中国人会社のほとんどではないにしても多くが再組織され、中国人商人たちは、タイ人官吏と協力して新しい中・タイ法人を設立し、そして幾人かの中国人商人は半公営の企業に経営者の資格で加わってきた。タイを現在統治している軍事独裁制はその政治力、軍事力のための経済基盤を得たいと欲しているだけのため、これらの事業の発展は可能であった。事業における官吏の役割は他の国ではめったに到達することのないほど極端なものであった。しかしそれがタイ人によって、少なくとも特有のものであると思われる限り、それは、経済のタイ化という理由で見のがされるのである。すなわち政府高官は彼ら自身、タイの国民経済の「回復」への道を先導しているのである。経済協力が中国人及びタイエリート間で発展してきた度合いは、1955年来にバンコクで行なわれた中国人指導者の研究によって示されている。10人の最も影響力のある中国人指導者のすべてがタイ政府高官と公式な仕事上の関係を持っている。50人の最も影響力のある指導者のうち72%と、影響力のある上位100人の指導者のうち60%が、タイエリートとそういった関係を持っているのである。ほとんどすべての主要なタイの政治的大立者がピブン自身を例外と

して巻き込まれている。主要な中国人実業家たちは、現在の支配集団の権力の維持に利害を持つほど、タイ官僚と深い関係になっているのである。

2つのエリートの自己利益に基づく、事業段階でのこのような親交関係は、タイ支配階級内部に親密な関係をもつ指導者にとって、中国人社会の必要性から強化されている。というのは政府からの保護と接渉は、中国人指導者の基本的役割となっているからである。ふたたびタイ支配階級と親密な接触のある中国人指導者は、タイエリートの承認によって出される特典や威信をむやみに欲しがっている。もし中国人商人がタイの名前を用い、言葉を上手に話すならタイエリートとの社交がすでに彼にとって可能となっているのだ。彼に富と権力があるならば、彼はいかなる場合にも、彼の子孫にタイおよび国際的教育を与えることによってタイエリートの中に一員としての地位を、かなり上手に確保することができる。タイ国の中国人指導者は彼らの子弟を、中国人学校によりはもっと頻繁にミッションスクールやタイの学校に送るのである。段々と頻繁に、彼らの家族はタイエリートと結婚しつつあり、また彼らの子供が現地生れの華僑と結婚する時ですら、その場合はしばしば、タイスタイルの儀式でタイの政治家が司会を務め、中・タイ社会結合の機会となるのである。中・タイクラブは2つの集団のエリートを一緒にすることで人気をよんで増加している。

半世紀前、チュラロンコン（Julalongkon）王の治世下で公式な慈善が行なったのと同じようにピブン治世下の公的な非妥協が、影響力ある中国人をタイエリートの中に引き込むように作用したのは、逆説的ではあるが、それにも拘らず事実である。バンコクの指導者の研究は、中国人社会で最も高く尊敬されている中国人指導者は、彼らより威信のない仲間よりもっと同化され安いということを立証した。これらの実例から中国人指導者は、全中国人社会を、より大きいタイ社会との一大統合の方向に導いていくかもしれないということを示唆している。

#### (4) まとめと展望

この研究は、たとえばシャムにおける中国人といった、移民少数派の同化の過程に、現地の政治要因がかなり影響を持つことを立証している。政治エリートのその本性はタイ国においては大いに重要であった。同国の歴史を通してタイ社会への中国人の同化を刺激していたのはタイ人であった。20世紀初期には民族主義者の偏向が同化を遅らせた。第二次ピブン内閣の新しい権力エリートが、安定した経済基盤を欠いていたということは、中国人商人階級と同化同調者との和解を推進したのである。

タイ政府の政策も又、関連した社会的あるいは文化的諸要因を操作したり管理することによって同化率に影響を与えることに効果があった。特にこのことは教育や入国に関する基準についてそうである。しかし職業、労働また外国の政治もまた重要である。近代においては選択的な中国人規制は、集団で一致団結心を育成する抑制策を別として、効果的に

同化を刺激することができる」と結論づけうる。中国人エリートの自己利益を、タイ人エリートのそれに結びつける政策も、また重要である。なぜなら中国人エリートは中国人社会の模範的代送良と正式の指導者の両方を包含するからである。

概して、タイの政策は近代以前（pre-modern）時代に、チラロンコン治世を通じて、同化賛成者であった。今世紀初期のタイ政策の変化は、中国民族主義や教育の勃興そして、中国人女性の移住増加といった要因によって引き起こされた同化率の衰退をいっそう強めた。しかしながら20年代、30年代にはますます、タイの政策は、さほど成功はしなかったものの、中国人同化の低下傾向を止めようとした。1938年から1947年まで、初めの抑圧的な封じ込め政策と、それに続く自由放任政策の結果は社会的、国際的な変化という同化を阻止する影響を強化することになった。そのため中国人の同化率は1947年までにその最低点に達した。その後、たえず動揺する政策は、結局、一貫した同化賛成の方向に安定した。一方同時に、タイエリートとの確実な関係のため、中国人によって探し求めることが必要となっている。中国の共産主義者の勢力の恐威や、タイ政策の再転換の影響が、左程増大しそうでないので、中国人の同化率は、予知可能な将来、おだやかではあるが、高い水準を維持することが期待できる。

（原文脚注）

(1) 3つの典型的参考文献は次のとおりである。

『シャムの宝庫』The Siam Repository (1873)によると、中国人移民の孫は「一般にシャム国民と考えられることを好み、祖父の習慣や習性を拒否する」

ハレット Holt s. Hallet (『シャム国、象にのって1000マイル』“A Thousand Miles on an Elephant in the Shan State”〔ロンドン1890年〕461頁)の言うところでは「中国人移民の孫は、シャム人として分類、登記され、そう判断が下るや否や、賦役労働にかり出される……政府の役人によって肩に50インチの目印がつけられる」トンプソン Peter A. Thompson (『ハスの国』Lotus Land〔ロンドン、1906年〕76頁)はこう書いている。僑生は「シャム語を話し、弁髪に対して特別の尊敬の念をもっていない。たいていはそれを不要としている。そして、情緒でも作法でも彼等は完全にシャム人である」と。

(2) 性別に移民が記録された最初の年1921～22年には、わずかに中国人移民の15%が女性であった。

(『シャム統計年報』Statistical Year Book of Siam 第18号, 981頁)。一方、1945～49年を合わせると、増加した中国人移民の34%が女性であった。(バンコク移民局の統計)。

(3) これらの要因については、筆者既刊『タイの華僑社会—歴史的的分析』(Chinese Society in Thailand: An Analytical History) (イザカ、コーネル大学出版1957年)により詳細に論じている。

(4) ヴェリエ Jerimias van Vliet, 「シャム王国物語」ラベンスウエイ訳 L. F. von Ravenswaay 『シャム社会ジャーナル』誌 Journal of the Siam Society, VII, Part 1 (1910年, 51頁) 所収, マンデルスロ A. de Mandelslo, 「ホルスタイン公爵・フレデリックによって派遣された大使の航海旅行記」(ロンドン, 1662年) 122, 130頁〔ジョージ・ホワイトの著か? George White〕『シ



- ャム貿易報告』Report on the Trade of Siam, 1678年, インド統計局
- (5) 謝猶榮 Hsier Yu-jung, 『暹羅国志』（シャム地名辞典）バンコク, 1949年49頁
- (6) カムファー Engelbert Kaempfer 『日本史—シャム王国附記—』The History of Japan together with a Description of the Kingdom of Siam, 1690~92, シュワイツァー訳 J. G. Scheuchzer (グラスゴー, 1906年) 38頁
- アンダーソン John Anderson, 『17世紀, イギリスとシャムとの交渉』English Intercourse with Siam in the 17th Century (ロンドン, 1890年) 426頁
- フランシス, チョイシー共著『1685~86年シャム航海記』Francois T., abbé de Choisy, Journal du voyage de Siam fait en 1685 et 1686 (パリ, 1687年)
- (7) 夏鼎勳 Hsia Ting-hsün 『閩僑吳陽及其子孫』（福建華僑吳陽とその子孫）『華僑新語』（バンコク）No.11~12, (1953年)
- (8) カンベル J. G. D. Campbell 『20世紀のシャム』Siam in the Twentieth (ロンドン, 1902年) 276頁
- (9) グズラフ Charles Gutzlaff 『1831, 32, 33年における中国沿岸への3つの航海記——シャム, 朝鮮, 琉球案内——』Journal of Three Voyages along the coast of China in 1831, 1832 and 1833, with Notices of Siam, Corea and the Loo-Choo Islands (ロンドン1840年)
- (10) バスチャン Adolf Bastian, 『東アジアの住民』Die Völker des östlichen Asien (ライプツヒ, 1867年) III, 68頁
- (11) ラクエツ A. Raquez 『シャム人?へのコメント』Comment s'est peuplé le Siam? L'Asie française, No.31 (1903年10月) 428~438頁
- (12) ブルネイ長官 Captain H. Burney, 『スランのプラヤへの使節と, クロウのイストマスの首長の報告』Report of the Mission to the phraya of Salang and the Chiets on the Isthmus of Krawl 『ブルネイ報告』The Burney Papers, 1825年4月2日号 (バンコク, 1910年) II, 217頁所収, Bangkok Times 紙1936年2月21日付に掲載。
- (14) スミス H. Warrington Smyth 『シャムでの5年』"Five years in Siam" (ロンドン, 1898年) I., 285~286, 320頁
- (15) カンベル, 前出, 270~274頁
- (16) 「シャムの中国人」"Les Chinois au Siam" Revue indo-Chinoise, N. S.V (1907年1月15日), 63~64頁
- ガーニエル Charles M. Garnier, 『中国の植民地バンコク』"Bangkok, colonie chinoise, ou le secret du colosse jaune" Revue du mois, XII (1911年8月10日) 231~236頁
- カンベル, 前出12~13頁
- Siam Free Press, (1906年9月27日)
- (17) ランドン Kenneth P. Landon による翻訳文書『タイの中国人』The Chinese in Thailand (ニューヨーク, 1941年) 34~43頁
- (18) 「ラザナコシン王の帰化法」Naturalization Act of Rathanakosin, 130 (1911~1912), 第6条, 「B. E. 2456年 (1913~1914年) の国籍法」"Nationality Act of B. E. 2456" 第3条, とともに1952年まで有効であった。

- (19) 30年代における中国人教育に関する統計は『シヤム統計年鑑』“Statistical Year Book of Siam” No.18, 418頁『謝猶榮』299頁。
- (20) ランドン Lan don, 前出146~153, 181~185, 219~255, 277~288頁参照。
- (21) 「ニコン」“Nikon”, 1940年1月20日付ランドン Landon, 前出64~65頁参照
- (22) 外国人登録税は, 1937年年額4 パーツと決められた。1946年に8 パーツに増え, 1949年には20パーツにまで増えた。1939年から1949年の間に5 倍にふえたことは, パーツのインフレーションに歩調を合わせたものでは全くなかった。1952年タイの外国人の93パーセントが中国籍であった。
- (23) この研究および1952年における中国人指導者の端初的研究の結果は近刊の『タイ華僑社会の指導性と力』Leadership and Power in the Chinese Community of Thailand (アジア研究協会の専門書) に記述され分析されている。

### ＜資料その2＞ 華僑関係文献目録

——伝統的中国人社会に関するもの—— (1944~1976年, スキナー教授推薦のもの)

1. Aird, John S.  
1968 'Population growth.' In *Economic trends in Communist China*, edited by Alexander Eckstein, Walter Galenson, and Ta-chung Liu. Chicago: Aldine, 183—327.
2. Baker, Hugh D. R.  
1968 *A Chinese lineage village: Sheung-shui*. Stanford: Stanford U. Press.  
1976 'Extended kinship in the traditional city.' In *The city in late imperial China*, edited by G. W. Skinner. Stanford: Stanford U. Press, forthcoming 1976, 497—518.
3. Bodde, Derk, and Clarence Morris  
1967 *Law in imperial China*. Cambridge, Mass.: Harvard U. Press.
4. Brim, John A.  
1974 'Village alliance temples in Hong Kong.' In *Religion and ritual in Chinese society*, edited by Arthur P. Wolf. Stanford: Stanford U. Press, 93—103.
5. Burling, Robbins  
1974 *The passage of power: Studies in political succession*. New York: Academic Press
6. Chesneaux, Jean  
1971 'Secret societies in China in the nineteenth and twentieth centuries.' Ann Arbor: U. of Michigan Press.  
1973 *Peasant revolts in China, 1840-1949*. New York: Norton.
7. Ch 'ü, T'ung-tsu  
1962 *Local government in China under the Ch'ing*. Cambridge, Mass.: Harvard U. Press.
8. Cohen, Jerome Alan

- 1966 'Chinese mediation on the eve of modernization.' *California law review* 54, 2: 1201-1226.
9. Cressey, George B.
  - 1955 *Land of the 500 million: A geography of China*. New York: McGraw-Hill.
10. Crissman, Lawrence W.
  - 1972 'Marketing on the Changhua plain, Taiwan.' In *Economic organization in Chinese society*, edited by W. E. Willmott. Stanford U. Press, 215-259.
11. DeGlopper, Donald R.
  - 1976 'Social structure in a nineteenth-century Taiwanese port city.' In *The city in late imperial China*, edited by G. William Skinner. Stanford: Stanford U. Press, 633-650.
12. Dunstheimer, Guillaume
  - 1972 'Some religious aspects of secret societies.' In *Popular movements and secret societies in China, 1840-1950*, edited by Jean Chesneaux. Stanford: Stanford U. Press, 1972, 23-28.
13. Elvin, Mark
  - 1973 *The pattern of the Chinese past*. Stanford: Stanford U. Press.
14. Eberhard, Wolfram
  - 1952 'Periods of feudalism, gentry society, and the formation of a middle class. In *The pattern of Chinese history: Cycles, development, or stagnation?* edited by John Meskill. Boston: Heath, 1965, 57-65.  
[Reprinted from *Conquerors and rulers: Social forces in medieval China*. Leiden: Brill, vii-x, 1-17.]
15. Fei Hsiao-t'ung
  - 1946 'Peasants and gentry: An interpretation of Chinese social structure and its changes.' *American j. of sociology* 52, 1: 1-17.
16. Fei Hsiao-t'ung and Chih-i Chang
  - 1945 *Earthbound China: A study of rural economy in Yunnan*. Chicago: U. of Chicago Press.
17. Feuchtwang, Stephan
  - 1974 'City temples in Taipei under three regimes.' In *The Chinese city between two worlds*, edited by Mark Elvin and G. William Skinner. Stanford: Stanford U. Press, 263-301.
  - 1975 'Investigating religion. In *Marxist analyses and social anthropology*, edited by Maurice Bloch. New York: Halstead, 61-82.
  - 1976 'School-temple and city god.' In *The city in late imperial China*, edited by G. William Skinner. Stanford: Stanford U. Press, forthcoming 1976, 581-608.

18. Freedman, Maurice
  - 1966 *Chinese lineage and society: Fukien and Kwangtung*. New York: Humanities Press.
19. Golas, Peter J.
  - 1976 'Early Ch'ing guilds.' In *The city in late imperial China*, edited by G. William Skinner. Stanford: Stanford U. Press, forthcoming 1976, 555—580.
20. Grimm, Tilemann
  - 1976 'Academies and urban systems in Kwangtung.' In *The city in Late imperial China*, edited by G. William Skinner. Stanford: Stanford U. Press, forthcoming 1976, 475—498.
21. Groves, R. G.
  - 1969 'Militia, market and lineage: Chinese resistance to the occupation of Hong Kong's New Territories in 1899.' *J. of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society* 9: 31—64.
22. Ho, Ping-ti
  - 1959 *Studies on the population of China, 1368—1953*. Cambridge, Mass: Harvard U. Press.
  - 1962 *The ladder of success in imperial China: Aspects of social mobility, 1368—1911*. New York: Columbia U. Press.
23. Hsiao, Kung-chuan
  - 1960 *Rural China: Imperial control in the nineteenth century*. Seattle: U. of Washington Press.
24. Hsieh, Winston
  - 1974 'Peasant insurrection and the marketing hierarchy in the Canton delta, 1911.' In *The Chinese city between two worlds*, edited by Mark Elvin and G. William Skinner, Stanford: Stanford U. Press, 119—141.
25. Hu, Hsien-chin
  - 1944 'The Chinese concept of face.' *American anthropologist* 46, 1: 45—64.
  - 1948 *The common descent group in China and its functions*. New York: Viking Fund.
26. Hucker, Charles O.
  - 1975 *China's imperial past: An introduction to Chinese history and culture*. Stanford: Stanford U. Press.
27. Kuhn, Philip A.
  - 1970 *Rebellion and its enemies in late imperial China: Militarization and social structure, 1796—1864*. Cambridge, Mass.: Harvard U. Press.
28. Moore, Barrington, Jr.

- 1966 *Social origins of dictatorship and democracy: Lord and peasant in the making of the modern world*. Boston: Beacon Press.
29. Mote, Frederick W.
- 1976 'The transformation of Nanking.' In *The city in late imperial China*, edited by G. William Skinner. Stanford: Stanford U. Press, forthcoming 1976, 101—153.
30. Myers, Ramon H.
- 1970 *The Chinese peasant economy: Agricultural development in Hopei and Shantung, 1890—1949*. Cambridge, Mass.: Harvard U. Press.
31. Nathan, Andrew J.
- 1976 *Peking politics. 1918—1923: Factionalism and the failure of constitutionalism*. Berkeley; U. of California Press, 1976.
32. Novikov, Boris
- 1972 'The anti-Manchu propaganda of the Traids, ca. 1800—1860.' *Popular movements and secret societies in China, 1840—1950*, edited by Jean Chesneaux. Stanford: Stanford U. Press, 49—63.
33. Pasternak, Burton
- 1972 'The sociology of irrigation: Two Taiwanese studies.' In *Economic organization in Chinese society*, edited by W.E. Willimott. Stanford: Stanford U. Press.
34. Perkins, Dwight H.
- 1969 *Agricultural development in China, 1368—1968*. Chicago: Aldine.
35. Potter, Jack M.
- 1970 'Land and lineage in traditional China.' In *Family and kinship in Chinese society*, edited by Maurice Freedman. Stanford: Stanford U. Press, 121—138.
36. Reischauer, Edwin O.
- 1960 'The dynastic cycle.' In *The pattern of Chinese history: Cycles, development, or stagnation?*, edited by John Meskill. Boston: Heath, 1965, 31—33.  
[Reprinted from *East Asia: The Great Tradition*, by Edwin O. Reischauer and John K. Fairbank. Boston: Houghton Mifflin, 114—118.]
37. Schipper, Kristofer M.
- 1976 'Neighborhood cult associations in traditional Tainan.' In *The city in late imperial China*, edited by G. William Skinner. Stanford: Stanford U. Press, forthcoming 1976, 651—676.
38. Selden, Mark
- 1971 *The Yenan way in revolutionary China*. Cambridge, Mass.: Harvard U. Press.

39. Shiba Yoshinobu
  - 1976 'Ningpo and its hinterland.' In *The city in late imperial China*, edited by G. William Skinner. Stanford: Stanford U. Press, forthcoming 1976, 391—439.
40. Skinner, G. William
  - 1964 'Marketing and social structure in rural China, Part 1.' *J. of Asian studies* 24, 1: 3—43.
  - 1965 'Marketing and social structure in rural China, Part 2.' *J. of Asian studies* 24, 2: 195—228.
41. Skinner, G. William (cont.)
  - 1971 'Chinese peasants and the closed community: An open and shut case.' *Comparative studies in society and history* 13, 3: 270—281.
  - 1976 'Mobility strategies in late imperial China: A regional systems analysis.' In *Regional analysis, vol. 1, Economic systems*, edited by Carol Smith. New York, Academic Press, 327—361.CLIC Excerpts From *The city in late imperial China*. Stanford: Stanford U. Press, forthcoming 1976, namely
  - 'Part 1 Introduction: Urban development in traditional China,' 3—31.
  - 'Regional urbanization in nineteenth-century China,' 211—49.
  - 'Part 2 Introduction: Urban and rural in Chinese society, 253—73.
  - 'Cities and the hierarchy of local systems, 275—351.
  - 'Part 3 Introduction: Urban social structure in Ch'ing China,' 521—53.n. d, 'Cycles of regional development' (portion of an unpublished manuscript). Stanford.
42. Solomon, Richard H.
  - 1971 *Mao's revolution and the Chinese political culture*. Berkeley: U. of California Press.
43. Stover, Leon E., and Takeko K. Stover
  - 1976 *China: An anthropological perspective*. Pacific Palisades, Calif.: Goodyear.
44. Thaxton, Ralph
  - 1975 'Tenants in revolution: The tenacity of traditional society.' *Modern China* 1, 3: 323—58.
45. Topley, Marjorie
  - 1968 'Chinese religion and rural cohesion in the nineteenth century.' *J. of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society* 8: 9—43.
46. Townsend, James R.
  - 1974 *Politics in China*. Boston: Little, Brown.
47. Tuan, Yi-fu

- 1969 *China*. Chicago: Aldine.
48. Wakeman, Fredric
- 1972 'The secret societies of Kwangtung, 1800—1856.' In *Popular movements and secret societies in China, 1840—1950*, edited by Jean Chesneaux. Stanford: Stanford U. Press, 29—47.
- 1975 *The fall of imperial China*. New York: Free Press.
49. Wang Shih-ch'ing
- 1974 'Religious organization in the history of a Chinese town.' In *Religion and ritual in Chinese society*, edited by Arthur P. Wolf. Stanford: Stanford U. Press, 71—92.
50. Watt, John R.
- 1976 'The yamen and urban administration.' In *The city in late imperial China*, edited by G. William Skinner. Stanford: Stanford U. Press, forthcoming 1976, 353—390.
51. Wittfogel, Karl A.
- 1957 'Oriental despotism.' In *The pattern of Chinese history: Cycles, development, or stagnation?*, edited by Jhon Meskill. Boston: Heath, 85—95. [Reprinted from 'Chinese society: An historical survey.' *J. of Asian studies* 16, 3: 343—364.]
52. Yang, Martin C.
- 1945 *A Chinese village: Taitou, Shantung Province*. New York: Columbia U. Press.

（注）番号は、研究 者のナンバーで論文の数ではない。便宜的に付したもの。

#### 附 記

1976年10月、筆者がスキナー教授を Stanford Univesity に訪問の際示された Traditional Chinese Society 関係の文献目録である。同年次、文化人類学専攻の大学院学生（博士課程在学）に対し、中国の伝統社会の研究を講じられ、その必読文献としてリストアップされたものである。作成時期は、76年秋となっており、最近の教授の研究上の関心の所在と、アメリカにおける学会等の動向の一端を知ることができる。（1954～76年前半までの出版文献が収録されている）

なお、既に紹介したスキナー自身の著作、論文および本文中に引用されたものも含まれるが、教授のリスト作成意図を尊重し原文のままとした。

<未完>